

平成艸紙



おりおりの記

## 羅漢、山に登る

株式会社 日本格付研究所  
代表取締役社長

内海 孚

私は、京都の大徳寺から「宗僊」という居士号（居士とは在家のまま仏の弟子になること）を頂戴しているが、仏の救いや末世を信じているわけでもないし、まともに座禅を行ったこともない。

大学一年の秋休み、大徳寺大仙院を拝観で訪れたときのことである。昭和二八年という時代、未だ、ここを訪れる人も稀であり、住職の尾関南岳和尚の点てて下さるお茶をいただきながら、国宝の枯山水庭園の前で、静寂の時の流れに浸っていた。

当時、心の中に求めるものがあった、座禅をしたいと感じていたので、「和尚さん、東京の近くで座禅のできるお寺を紹介していただけませんか」と言うと、和尚は、言下に「座禅などすると、人間が悪くなる。よしなさい」と言う。私は、耳を疑った。この和尚は、不真面目なのではないか。

ところが、帰ろうとすると、和尚、「今度京都へ来たら、ここへ泊れ」。それに甘えて、大学時代の春秋の休みは、いつも、大仙院で暮した。後に和尚が話してくれたのだが、大学生ぐらいで座禅がしたいなどというのは、生真面目で固すぎる人間、大悟徹底するまで座るなら別だが、中途半端にやった場合は却って始末が悪い、ということだったようだ。

和尚は「わしは狸和尚やさかい、お前は小狸になれ」と言う。この狸派の師から日常生活を通じて受けたのは、むしろ、「軟派教育」であった。これを私なりに総括すると、人間が本来持っている本能や

情念を直視しつつ、これに淫することなく生きること、そして、人間の身体のもっと深いところから自然に発露して来る明るさこそ、仏それ自体なのだということに尽きるのではないかと思う。



大蔵省で税制改正などの厳しい仕事の最中に、師に会いたいと焼け付くように思うことがしばしばであった。合間を見て日曜日帰りで大仙院にかけつけたものであった。

和尚は、「また、一人で来たか。羅漢やなァ」と言う。羅漢は、自分の悟りだけを求める。これに対し、菩薩は自らの悟りとともに衆生を救うことも追求するのだという。振りかえってみると、本当に私は和尚の言う羅漢だなァと思う。皆と楽しむゴルフにも、マージャンにも無縁である。そして、師が遷化されてからは、大仙院に通う代りに、多くの場合独りで山に登っている。これが、花、新緑、紅葉など四季折々の華麗な道具立ての中で行う私の座禅なのである。